

バチルス ズブチリス水和剤 ボトキラー水和剤	取扱メーカー： 協友アグリ，日農，出光アグリ 原体メーカー： 出光興産
成分： バチルス ズブチリス芽胞…………… 1×10^{11} cfu / g	性状： 類白色水和性粉末 $100 \mu\text{m}$ 以下 毒性： 普通物 消防法： —

【品目特性】 ……………

- 微生物を有効成分とする国内初の灰色かび病防除用微生物剤。発病前に散布することにより、バチルス菌が植物体上に先に定着し、病原菌の活動を抑制することによって予防効果を発揮する。
- 作用機作は定着場及び葉面上の栄養競合作用による。
- 化学薬剤に感受性の低下した病原菌（耐性菌）にも有効である。化学剤と体系を組むことによって耐性菌密度を低下させることが可能である。
- 化学剤と同様の保存性を示し、使用方法も化学剤とほぼ同様の取扱いが可能で使い易い。
- 有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】 ……………

- 有効成分は生菌であるので、散布液調製後はできるだけ速やかに散布する。また開封後は密封して保管し、できるだけ早く使いきる。
- 保護作用が強く予防効果が主体なので、発病前～発病初期に7～10日間隔で散布する。
- 低温条件では効果が出にくいので、 10°C 以上が確保できる施設内で使用する。
- 散布量は対象作物の生育段階、栽培形態及び散布方法に合わせ調節する。
- 葉及び果実に汚れが生じるおそれがあるので、收穫時の散布に気をつける。
- 常温煙霧用として使用する場合は下記の注意を守る。
 - 専用の常温煙霧機により所定の方法で煙霧する。
 - 作業は密閉できる環境で行い、作業終了後6時間以上密閉する。

- ダクト内に投入する場合は下記の点に留意する。

- 1カ月当たり300～450 g 10 a 当たり300～450 g になるよう、暖房機などのダクト取り付け口付近からダクト内に投入する。

- 暖房機などが数時間以上運転される条件下で使用する。

- 稲のいもち病を対象とする場合、穂ばらみ期に散布した後、7～10日間隔で計2回以上散布することが望ましい。

【薬効・薬害等の注意】 ……………

- 夏期高温時の使用はさける。
- 他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
- 共通注意事項8. 適用作物群に関する注意事項を参照。

【安全対策上の注意】 ……………

- 作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯する。
- カブレやすい体質の人は作業には従事しないようにし、施用した作物等との接触をさける。
- 常温煙霧中及びダクトによる散布中はハウス内へ入らない。また、常温煙霧及びダクトによる散布終了後はハウスを開放し、十分換気した後に入室する。
- ダクトによる散布の際は、送風停止中に本剤をダクト内に投入する。
- ダクトによる散布後にハウス内で作業する際は、送風機を作動させない。



【適用と使用方法】

作物名	適用病害名	希釈倍数	10 a 当り 使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	パチルスズブチリスを 含む農薬の総使用回数
野 菜 類	灰色かび病 うどんこ病	1000倍	150 ～ 300 ℓ	発病前～発病初期	—	散布	—
ぶ ど う	灰色かび病		200 ～ 700 ℓ	開花期～幼果期			
かんきつ マンゴー							
な し	黒星病		200 ～ 300 ℓ	発病前～発病初期			
稲	いもち病	穂ばらみ期～刈取前					

●常温煙霧

作物名	適用病害名	10 a 当り使用量		使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	パチルスズブチリスを 含む農薬の総使用回数
		薬量	使用液量				
野 菜 類	灰色かび病	300 g	6 ～ 10 ℓ	発病前～発病初期	—	常温煙霧	—

●ダクト内投入

作物名	適用病害名	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	パチルスズブチリスを 含む農薬の総使用回数
野 菜 類	うどんこ病	15 g / 10 a / 日	発病前～発病初期	—	ダクト内 投入	—
マンゴー	灰色かび病	10 ～ 15 g / 10 a / 日				
		10 g / 10 a / 日				
花き類・ 観葉植物		10 ～ 15 g / 10 a / 日				
かんきつ ぶ ど う		15 g / 10 a / 日				